

新山協ニュース

発行所 新潟県山岳協会
〒940 長岡市学校町1-12-23 室賀輝男 TEL 0258-32-0428

指導員検定会報告

検定員 三 富 一 弥

県山協の主催で指導員第一

次検定会が5月30日、31日、

残雪の荒沢岳、中荒沢で氷雪

技術の検定が催された。指導

員検定は二次に分けられ、一

次は氷雪技術、二次は岩登り

技術、学科と三科目を二回に

わたって検定される。検定評

価は各検定項目について、指

導法(知識)と実技について

行なわれる。特に指導法では、

手順、要領をよく説明できる

ことが重要である。実技は、

要点を強調し、正しい用語で

説明して、実際に行動できる

ようでなければならぬ。得

点については、各科目、百点

満点で一科目六〇点未満の科

目のない事が検定基準でうた

われている。

受験者は各クラブ、山岳会

の代表の推薦によるえりすぐ

られた人ばかりである。30日

午後1時、開講式が行なわれ、

早速検定会の第一日目が始ま

る事になる。検定員も二班に

分かれ各班を担当する。受験

者も二種、地区と二分し、二

種の受験者が交替制でリーダー

を務める。

朝の挨拶と今日のスケジュ

ールの説明が終わると、早速目

的地中荒沢に向かって出発。

快晴に恵まれた中荒沢の雪渓

が白くまぶしく、我々を歓迎

するかのよう光り輝いてい

る。所々の残雪を踏みながら

約1時間、沢は雪渓にうずも

れた検定会場の急斜面に着く。

ここで一呼吸入れて、土樽の

伊藤さんより海外登山の話

面白く楽しく聞かせてもら

う。これから始まる雪渓技術の

検定会に気分を少しでも和ら

げるように気をつけていた

いた楽しい一時であった。

いよいよ各班に分れて検定

開始。一班の田中検定組は急

斜面にノアイゼンで雪上歩

行から始まる。二班の三富

定組はピッケル技術から始め

る。雪上に入る前にピッケル

技術、ピッケルの説明、用途

目的等、二種受験者の指導方

法などみせてもらう。次いで

滑落停止の指導法と実技、終

つて雪上歩行にうつる。急斜

面での事故防止の為、私はあ

えてピッケル技術から検定に

入ったわけだが……。

続いてアイゼン歩行。県内

の山にはアイゼンの必要ない

せいかアイゼン技術は不慣れ

が目立った。続いてスターカ

ットは、ザイル操作、シュリ

ング、カラビナの使い方等重

要視する。新技術の為、戸惑

いが見られたが、直ぐマスタ

ー、ダイナミック、ピレーを

身をもって感じた事だろう。

終了予定の12時が近くなり最

後のコンテナアスの検定の時

間がなくなってきたが、3人

パーティに組み、二種受験者

がパーティのリーダーとなり

一パーティずつ検定したが、

どのパーティも昨日のダイナ

ミックピレーをするものがい

なかった。

早速検定会を研修会に代替

え、新確保技術の訓練とする。

わずかの時間の為、満足にマ

スターできたかどうか不安

だが、ザイル操作がむずかし

く、滑落停止姿勢が完全にマスターできないとこの技術は完成しない。何回も何回も繰り返して練習して始めて自分のものになる。

検定会を終了、閉講式での藤井講師の講評の中に指導法はうまいけどそれに伴って実技がどうも一歩足りないと話されたが、受験者はどう感じただろうか。

今回は指導員として事故を未然に防ぎ、確実に、かつ、楽しい登山を指導できることで指導力を重点的に検定したが、用具や技術の説明のみに終り、パーティ全体の把握と安全性に欠けていたような気がする。この事が次回の岩登りに適合する事だろう。

受験者はこの検定会に各山岳会やクラブの代表の推薦で参加しているの、検定会中の行動は各山岳会、クラブの代理代表者である。そのため登山者としてのマナーに反する事は自分自身の恥と同時に会に迷惑をかける事になる。十分自覚しなければならぬ。

今回の検定会中二つの事があげられていた。その一つは、30日の論文提出後に行われた新確保技術研修中に一部の受験者が勝手行動をとり検定員の指示に従わず、秩序を乱していた。その受験者は翌日の検定には正しい確保技術を身に付けていなかった。もう一つは、歓談夕食会場で、自己の立場を忘れた行動をとる一部の受験者が見受けられ検定員の愁眉を買っているものがある事は残念である。受験者をもっと謙虚であらねばならぬ。

今回の検定会には立派な指導力と技術をみせてくれる事を期待したい。それと共に新潟県にブライドを持つより立派な指導員が誕生できるように祈っている。又、全員の合格できるように期待している。

審判長 片桐 一夫

第36回国体県予選会

審判長 片桐 一夫

第36回滋賀国体の新潟県予選会が4月11日・12日の両日、長岡市東山連峰を中心として開催されました。

何週間も前から準備に追われており、特に今年の場合、積雪が例年になく多いので縦走コースの設定やら、踏査コースの設定に苦勞がありました。

また、登攀会場が栖吉川に落ち込む岩場のため、川に足場作りの苦勞が加わりました。一週間前に一日かかって作り上げた立派な橋が雪融けの増水で流されかかり、夜間にこれを回収、大会当日早朝に作り直したりで各々の担当の方々にはただただありがと

うございましたとお礼を申し上げるばかりでした。

いよいよ第一日目の朝は、いくらかハダ寒さもありました。雨が降り、順調に開会式が始まり、正午少し前、成年一組目が悠久山ブル正門をスタート、踏査競技が開始されました。成年は約6キロ、メートルの距離と悠久山から栖吉町へと歩き、登攀会場近くのゴール地点へ移動。小休の後、登攀競技が始まりました。少年は登攀がないため、約8キロメートルを踏査してもらい、終了後は花立峠出合の幕営地へと移動、雪上幕営に入りました。登攀競技は岩がややぬれざみだったせいもあると思いますが、時間が多くなると、最終組の終了が午後6時を回ってしまい、競技運営について反省感をいただいています。

二分間隔でそれぞれスタートして、花立峠——鋸山——八方台——成願寺のコースに出て行きました。私は全パーティの出発を見送った後、コースを逆に火打沢を登り、八方台より下って来る選手達を迎えましたが、雪上歩行もなかなかのもので、全員元気に成願寺ゴールへ入ることが出来ました。成願寺よりは選手の手が歩いて悠久山へ向かってるうちに採点集計、順位決定、賞状書きなど手際よくやっていただき、閉会式へと無事に大会全日程を終了することが出来、大会役員の方々、そして準備に何日もかかっていた地元の元、長岡ハイキングクラブの皆様、ほんとうにありがとうございました。

予選会の結果は、5月10日の理事会において7頁のごとく、監督・選手が決定しました。各会皆様のご指導ご教示宜しくお願ひします。

公認指導員検定基準

参考 登山指導教程 I

雪上歩行 (アイゼン無し)

1. 常に一点支持でバランスをよく保ち、一定のリズムで歩く。
2. 姿勢を正しく保ち、視線は進行方向に向ける。
3. くつ底全体で雪面を踏み固めるようにし、雪面との摩擦を利用する。
4. ピッケルは、バランスの補助として使用する。
5. 歩行するとき(登高)靴底全体を同時に雪面から離すような感じで歩く。普通の平地を歩くように、後足が踵から離れてゆくような体重の移動は、スリッしやすい。
6. 下降の場合は、足を高く上げずに、また、登高の歩幅より少し広くとって、リズムミカルに歩く。

雪上歩行 (急斜面)

1. 直登高の場合は、靴底を水平にし、靴先をまっすぐ雪面へけりこんで足場を作るようにする。
2. 斜登高の場合は、山側の足は外エッジで、谷側の足は内エッジで足場を作る。
3. 下降の場合
 - (イ) ひざのバネをきかし、つま先を上げ、踵を垂直に雪面に食い込ませるようにして足場を作る。ピッケルはバランスの補助に使う。
 - (ロ) 前向きの下向で不安な急斜面は、斜面に正対し、ピッケルを確実に突き、つま先を蹴り込んで足場を作りながら下降する。
 - (ハ) 堅雪の急斜面を下るときの歩幅は、登りの時の歩幅より小さきみに下る。

4. その他

- (イ) 登りも下降も、歩幅を広くとりすぎると、キックが困難でバランスをくずしやすくなる。
- (ロ) 登りも下降も上体を山側に倒しすぎないように注意する。
- (ハ) 方向転換は、バランスをくずしやすいので十分注意する。両足をそろえてから新たな方向へ踏み出すこともある。

ま と め

堅雪の急斜面といっても、それぞれ個人的な技術によっていちがいに決められないが、キックステップの限界を越す堅さでは、当然ピッケルによるステップカットを行うか、アイゼンを付けることになるわけである。

堅雪や氷化した斜面が急になってからでは、アイゼンを付けるのが非常に困難となるから、実際にはもっと早い時点でアイゼン登高に切り換えるべきである。

ピ ッ ケ ル

使用目的と効果

氷雪の斜面の登下降に使用し、次のような用途がある。

- | | |
|----------------|---------------|
| 1. バランスの補助 | 2. ステップカッティング |
| 3. 確保の支持点 | 4. 耐風時のささえ |
| 5. 滑落時の停止用具 | 6. グリセードのささえ |
| 7. クレバスなどの探索用具 | 8. 氷壁登攀時のホールド |
9. その他、使用に際しては自分の身体の一部であるかのように充分使いこなせるようにする。

用具の知識

1. 材 質

- (イ) 炭 素 鋼
- (ロ) ニッケル・クローム鋼 (低温でも比較的強度がある)
- (ハ) クローム・モリデン鋼 (")

2. シャフト部分

- (イ) 木 製 (青たも、とねりこ、ヒッコリー)
- (ロ) 竹 製 (合 竹)
- (ハ) メタル (軽合金パイプに強化プラスチックを圧着)
- (ニ) その他 (グラスファイバー等)

3. 名 称

- (イ) 頭 部 (ピック、ブレード、ヘッド、フィンガー)
- (ロ) 柄 (シャフト)
- (ハ) 石 突 (ハーネス、スピッツェ)

実際の使用法

4. 種類

- (イ) 一般用 ステップカッティングが容易 (用途は広い)
- (ロ) 登攀用 ピックの角度が強く、カッティングよりもピックの打込みによるホールディング効果を目的としている。

5. 形状

- (イ) 穴なしピックル、穴あきピックル
- (ロ) 特殊ピックル
 - (1) アイスバイル
 - (2) アイスバイルとピックルの両用に使えるアタッチメントのあるもの
 - (3) アイスハンマー

1. 使用の基本

- (イ) バランスの補助
- (ロ) カッティング (ステップ、ホールド、その他)
- (ハ) 確保支点 (シャフト、ピック)
- (ニ) 滑落時の停止用具

2. 使用上の注意

- (イ) ブレードを前にしたステッキ持法が一般的である。
- (ロ) 雪質、斜度等の条件に応じてピックを前にした持ち方もある。
- (ハ) ピッケルに頼りすぎないようにする。
- (ニ) ピッケルの持ち換えは不自然さがあるので持ち換えなくてもよい。
- (ホ) 自己確保の支点に使用する場合は、山側、身体の重心より上部に打ち込むこと。

3. カッティング

雪にはブレード、氷にはピックを使用することが原則である。

(イ) 限界についての理解

- (1) アイゼンの限界を越えたとき
- (2) 斜面の斜度と氷雪の状態
- (3) メンバーの技量
- (4) 荷の重さ
- (5) 疲労度
- (6) 風の状況

◎ 原則として片足で立つことが不安定になったときの限界であろう。

(ロ) 握る位置と振り方

- (1) シャフトの長さ、ブレードからピックにかけての曲りおよびピックルの重心によって決まる。
- (2) 振ってみて、もっとも振りやすく、ブレード (ピック) の先に力が入る位置を決めておく。
- (3) 片手のみで振ることに固執する必要はない。ハンドホールドのカッティングもあることを覚えておく。
- (4) 腕力にたよらず、手首のひねりを使って一発で切るように心がける。
- (5) 氷雪を水平に削り取るようにカットする。
- (6) ブレードの先に角度をつけない (抜けなくなる)
- (7) 斜面を横に切る。
- (8) 足場通常2個ずつに切る。
- (9) 歩幅とステップの位置に注意 (方向、斜度の関係)
- (10) 目標をしっかりと定めてからカッティングを開始する。
- (11) 後続者に注意する。
- (12) 下降のことも考えながらカッティングをする。
- (13) 下降時のカッティングはバランスをくずしやすいので注意深く行う。
- (14) カッティングする側に半身に開いた姿勢をとるとバランスがとりやすい。

4. 確保

(イ) ザイルを使わない場合のピックル使用法

- (1) 登下降時の方向転換 (ターン) の支点 (雪面に打ち込む)
- (2) 耐風姿勢をとる際の支持点
- (3) バランス立て直しのための支持点
- (4) 滑落停止のためのブレーキ、ストッパー

(ロ) ザイルとともに使う場合 (ピレーピンとして)

- (1) シャフトはできるだけ深く差し込む。
- (2) 自己確保の場合打ち込むシャフトは確保者より上 (確保者の重心より上) に打ち込み、しっかりした足場に立つ。

- (3) 堅雪の場合は、ピックが山側になるように打ち込む(ショックに対して強い)
 (4) 差し込むシャフトの方向は斜面に対して直角よりやや垂直気味にする。
 (5) 氷又は堅雪の場合はピックを打ち込む方法もある。
 注意 このような場合は頭部又はシャフトを靴底又はひざで押さえること。
 (6) ビレーピンとしてのピッケルは、ショックに対して弱いから必ず制動確保を行う。

滑 落 停 止

「すべって止まる」のではなく、万一滑落したときのセルビレーである。あくまでも注意深く行動することが大切で、それにもかかわらず突然スリップした場合の停止手段である。このような突然のスリップがおこるのは、きわめて条件の悪いところであり、スリップ直後の一瞬が勝負の別れ目である。従ってとっさに有効な動作を起こすことが大切である。

この一瞬に踏み止まれず、すべり出してしまったら、熟達者といえども確実に停止させることは至難のわざである。

基 本 形

きき腕でピッケルのヘッドを握り、他方の手でシャフトを握る。ピックを立てて、ブレードをきき腕の肩口に引き付け、上半身の体重を集中するように打ち込む。この場合両ひじをからだに密着させ、シャフトを握った手を腰に引き付ける動作は、きわめて重要な要素である。

(イ) 体の向きをくずさないように足は広げる方がよい。

(ロ) アイゼンを付けている場合、ツアツアが雪面に引っかかり体が逆転することがある。このことを考慮し、ひざから下は少し上げ気味にすることはよいが強調するべきでない。

指導上の留意事項

(初心者に最適のフォームを覚えさせるために)

1. 平地で完成したフォームをとらせる。
2. 斜面を選び、停止した正しいフォームからピックを抜かせ少し滑ってから再び打ち込ませる。
3. フォームの仕上げ
4. 初動タイミング練習
5. 横転、逆転のバリエーション

応 用 形

(主として下降時のスリップのために)

1. 尻もちをついた姿勢で足を大きく開きピックをにぎった手と同じ側の足のひざを多少まげぎみにする。
2. まげた足のももをピッケルシャフトで押えつけるようにして、ピックを腰の斜め後方に打ち込み、上体の腰部に近い部分と手でしっかり押えつける。
3. シャフトを握った手はピッケルがねじれたりシャフトが持ち上げられないように押えておく。
4. 足のブレーキも効果的に使う。
5. 上体が後方に倒れすぎないようにする。
6. 停止しない場合、又は立ち上がるのにそのままでは不安のある場合は、きき腕側に反転して基本姿勢をとる。

留 意 事 項

1. 習熟によって、止まれるようになったからといってこれによる確信は排除すべきである。
2. 停止したら足場を確実にして、ピッケルを支点に起き上がるようにすること。
3. ピッケルの急激な打ち込みは、堅雪の場合ピッケルをとられる恐れがある。従って除々に制動を加えながらピックを沈めてゆくことも時には大切である。

耐 風 姿 勢

要 点

瞬間的にくる突風に対処する確保姿勢

三脚のような体制(3点支持)

基本的には、山側を向き、足を大きく開き、ピッケル、両足に体重をかけ、体のバランスを保つ。

方法、留意事項

1. 「風には呼吸がある」その間を縫って行動し吹き返しを特に注意する。
2. 突風を予知したら重心はより低く、底辺はより広く、両足をフラットにふんぼり(アイゼン着用の場合)ピッケルを雪にしっかり突き差し、これにのしかかるように体重をかけ、腹部に対する風圧の少ない姿勢をとる。顔は風をさける向きで下向きとする。
3. 下降のときは、すばやく体の向きを山側に変えること。

氷雪上でのザイル・テクニック

氷雪上での確保

1. ザイルの操作の基本
 - (イ) ザイルの操作は、手袋またはオーバーミトンを着用したまま行えるよう、その扱いに習熟しておくこと。
 - (ロ) 手袋またはオーバーミトンを着用した状態でも確実に、結び解けるような結び方を習得しておくこと。
 - (ハ) 手許のピッケル、ピッケルバレードとザイルのもつれに常に注意すること。
2. 確保支点および足場
 - (イ) 支点、足場は、岩場でのものと比較して弱いものであることを意識して確保体勢をつくること。
 - (ロ) 確保時の荷重のかかる方向、およびそれに耐えられる合理的な姿勢を考えておくこと。
 - (ハ) 先登者の確保の場合は落下想線（ホール、ライン沿い）と確保位置の關係に配慮する。
 - (ニ) 自己確保の位置は確保者の重心より上部にとり、荷重が確保支点へのモーメント荷重にならないように配慮する事。
3. 動作
 - (イ) 先登者の確保は原則として、制動確保、後続者の確保を静的（弾性）確保による。
 - (ロ) 制動は握力によらずザイルと確保支点（身体、ピッケル、その他の支点）との摩擦を利用する。
 - (ハ) 制動の初期は小さな摩擦で、その後漸次増してゆく。
 - (ニ) 適切な制動距離を考えてザイルを扱う。
 - (ホ) 確保ザイルのスムーズな流れを考えてザイルを扱う（キンクに注意）

連続登攀（コンテナス・クライミング）

行動力の留意点

1. 原則として経験者が後に位置する。未経験者の行動を保護する場合はザイルの中間に入れる。
2. 適当な間隔でアンザイレンし各自が手で握れる程度数巻きのループをもつ。ループの大きさは、楽に手に下げた状態で引きずらない程度。
3. 余分のザイルはループにし、結んで肩にかけるかザックにつけておく（使用しないザイルの処置をきちんとして置かないと行動中ほぐれて行動中は支障をきたす。）
4. 行動中はザイルを引きずらないようにする。
5. 歩行速度の変化はループザイルの出し入れによって間隔の調整をする。
6. 常に最適の確保法を考えながら行動する。

確保動作についての留意点

1. 確保体制は瞬間的にとらなければならないが、沈着確実な動作が重要である。
2. 滑落方向を見きわめ、確保場所を決定する機敏な判断力が必要である。
3. 滑落者とザイル、確保支点の位置、荷重の方向を考えて最適な姿勢をとる。
4. 可能であれば制動確保が望ましい（先登者確保の場合）

確保法

1. 制動確保

制動確保としては肩確保、足首、ピッケル支点のグリップ、スタンディングビレーがあり、確実なものを習得しておくことが必要である。
2. 静的確保

雪面においたループの中にピッケルシャフトを突き立て衝撃荷重に耐えるようしっかりおさえつける方法や耐風姿勢と同様な体勢によって身体で荷重を受けとめる方法などがある。
3. 滑落停止姿勢におけるダイナックビレーは必ず習熟して欲しい技術の一つである。

第36回滋賀国体・第2回北信越国体 監督選手名

種別	役職	氏名	郵便番号	住所	所属
成年男子	監督	片桐一夫	940-21	長岡市上除町甲1765-1	長岡ハイキングクラブ
	選手	白石岩男	940	" 土合5-1-17	"
	選手	山本亨	940	" 寿1-2-51山幸鉄工所寮	"
	選手	中村政道	950-21	新潟市寺尾上3-4-37南ケ丘荘	新潟山岳会
成年女子	監督	加藤記代子	950-21	新潟市浦山町2-8-6	むささび会
	選手	本間澄子	950	" 牡丹山406-1	"
	選手	山崎寿穂子	950	" 紫竹6-26-3	"
	選手	江渡澄子	957-01	北蒲原郡聖籠町大夫興野174-2	"
少年男子	監督	帯刀勤	957	新潟市住吉町5-1-22	新潟田高校
	選手	白井茂之	957	" 中央町5-2-21	"
	選手	白田稔博	950-32	豊栄市木崎1855	"
	選手	矢吹直和	957-01	北蒲原郡聖籠町大字諏訪山2310	"
少年女子	監督	小林光衛	950-21	新潟市松美台7-23	新潟中央高校
	選手	高山香代子	950-21	" 寺尾東3-4-7	"
	選手	山田邦子	951	" 古町通9-1436	"
	選手	宮島正子	950-21	" 幸西4-273-6	"

登攀競技

今成幸夫

登攀競技には、登攀、懸垂下降、所要時間の三点について、審査採点しました。

コースは出発点より中間点までは、ホールド、スタンス

共に小さく、バランスとルート選定の判断力を、又ランニングピレエ点では、カラビナの掛け方、ザイルの掛け替え等、中間点では自己確保の時、体の位置及び支点の使用状態、ザイル操作、確保姿勢及び確保方法に重点を置き、中間点より上部のコースは、比較的簡単なのでコースを制限し、基本動作を忠実に守っているか等について審査した。

懸垂下降では、時間の関係でザイルの投下を省略したが、

下降時の自己確保から下降準備が基本どうり行なわれていたか、又制限コース内を忠実に下降したか等について審査した。

所要時間は、出発から登攀

終了までと、下降開始から全員着地終了までの合計時間を、所定の配点表より換算し配点した。

登攀中の問題点としては、中間点で一本のボルトで2人が同時に自己確保を取ったり、セカンド又は、ラストの確保にも、自己確保用ボルトで兼用していたパーティーも見受けられた。全般的にザイル操作が不馴れな為、時間の浪費

二つのことについて、今回

の感想をのべる。その一つは、大きな観点から、現地と地形図をよく見ていただきたいということだ。たとえば、山へ登る場合、登山口付近は、地形がゴチャゴチャしていてわかりにくい

踏査競技をみて

平田大六

が多い、又パーティー間の連絡は大声で、はっきりと連絡する習慣を身に付けて下さい。懸垂下降では、下降準備を基本通りに行ったパーティーが少なかった。又制限コースを外ずれて下降するパーティーも有りコースをよく見ていない。下降中は下を良く見て、着地点に着くまでは、下降姿勢を崩さず着地して下さい。今回の予選では、まだシーズン初めの為か岩に馴れていないようであるが、今後の練習に期待します。

ことが多く、そこをなんとかかわして、いくらか登りつめて見をろすと、視界が開けて、全体の様子がわかってくる。何故あんなところで、ウロウロしたのか、不思議に思われることは、よく経験することである。

これなど、はじめっから、目指す頂上などを、しっかりねらいにすえておけば、ふもとで多少道をまちがえても、大勢(たいせい)に影響はない。

その二は、リーダーシップをもっと考えてほしいと云うことである。道をさがしているときに、この指揮系統が充分生かされていなかった。

リーダーは、こんなときに、

今回の場合、悠久山公園を、他の二人の隊員に対して、越してゆく、という基本を、はじめに念頭に置いておけば、公園のなかで、道を細かく、間ちがったり、とんでもないモテルのほうに歩いていったりしなくてすんだものと思う。

これは、踏査競技は、オリエンテーリングではなくて、やはり、登山家としての行動が要求される種目であることの意味してはいないだろう。

この二は、リーダーシップをもっと考えてほしいと云うことである。道をさがしているときに、この指揮系統が充分生かされていなかった。

リーダーは、こんなときに、他の二人の隊員に対して、適確な指示をとばして、能率的に行動してほしかった。

これについて、もしも機会があったら、消防隊のポンプの操法を見学することをすすめる。消防車でかけつけるなり、指揮者のもとで、六人の隊員が無駄なく動作し、瞬間の放水する作業は、あざやかなものである。

踏 査 競 技

小林 光 衛

踏査競技は面白い競技である。点数化され、順位を決められる。それを意識しなければ(といっても無理かも知れない)登山というスポーツの持つ多様な基礎的な面を多

団の反省に私見をまじえてのべて見たい。

(1) マスターマップからの転写は殆んどミスがなかった。しかしシルバークンパス等に付属しているルーベ等の活用で、村落等での中員2米以下の道路、曲り角等でも正確さを心掛けていた

きたい。また転記する際のスピードも必要である。記入はボールペン色鉛筆で朱線をする必要もある。

(2) 設問に対する解答、定点記入も良かった。設問での解答は70%弱、定点は95%であった。

(3) 読図による踏査は2パーティ以外は欠点は見当らなかつた。

(4) 前記(1)・(2)項と関連するが、3名のチームワークによる作業分担の工夫が足りない。(1)では、誰が転写し、誰が確認をするのかといった点。(2)では定点の記入、設問に対する解答の研究・記入には工夫研究を要する。具体例をあげると成年組で

は住吉の大樫の樹木名とその由来に対する長岡市設置の説明プレートがあり、その前方20米地点に定点と設問があったが1パーティをのぞいてはほとんど無観察で通過しあわてもどつて確認した様である。もっと距離(定点と樹木との)があれば無解答にならざるを得ない。少年組では普濟寺の定点及び設問。山門の入り口に前記の長岡市設置の由来記があり設問としては牧野家初代藩主の氏名と、その墓石の形というのであるが、全パーティともウロウロするだけで、山門の由来記に気づかずしまいに山門から出て来られたお

婆さんに聞くといった様。それも全員がザックを背負ったままで殆んど休息の時間の設定も考えてない。設問の解答確認のためにはリーダーの指示で全員が動く。それも定められた時間内といった点の普段の鍛練が必要であろう。

(5) 高校の監督で1チームを編成され実地に踏査されたのには敬意を表する。

(6) 各地で開催されつつあるオリエンテーリング大会等に参加されたり、未知の山城を地図とコンパスで歩くなど研究していただきたい。

今後の研鑽をのぞむ次第である。

4月12日早朝より長岡東山みまです。全体的に言えることはリーダーの指示不足が目立ち、審

県 国 体 予 選 縦 走 競 技 について

笠原 嘉 明

4月12日早朝より長岡東山みまです。全体的に言えることはリーダーの指示不足が目立ち、審

査員の問いかけや説明とか、またチーム相互間でも返事の悪いのが気になります。能率の良い行動や危険防止に、またマナーの向上に、リーダーはもっと指導性を発揮してほしいと思います。

次に体力不足が指摘できません。地元チームはさすがに地形を熟知していて体力配分に優れた結果をあげていましたが、大半は訓練された体力がなく、若い力と心を持っていくのによく生かされていないのが残念です。

行動中を観察していて休憩地点や分岐点などで、地図を良く読めばもっと良い行動が取れるのと思う場面が多々ありました。人の踏み跡をその通り辿るだけという歩き方では、たとえ道がついている山であっても自分の山登りができないと思うのですが違いませんか。

装備は良い物を持っていたと思います。しかし重量制限があるために過装備になるのは仕方がないとしても、基本的な山行の在り方をきちんと押さえた持ち方(装備)を貫いてほしいと思いました。非常食、予備食、体温計を持つパーティーが少なかつたし、濡れに対する配慮がありませんでした。

幕営技術では張り方が遅すぎるのが気にかかります。またベグの扱い方や捨縄の細さ、ポールのがたつきなど耐風性に難点があります。耐湿対策としてグラウンドシートにナイロンを縫いつけてきたパーティーがありました。整地(雪)条件によっては入ってきた水が抜けぬ欠点も出て来ます。雪上でも溝を掘った方がこの時期には有効な方法だと思えます。

生活技術では食事の出来上りの遅いのが少年少女の方で眼につきました。ラジュースのからだきをしていて鍋がかかっていないのが一因でしょう。またテント内でも風防リングを着装した方が火力に無駄がありません。いずれにしても食当係とリーダーの不手際でしよう。

観察の項目では、比較的よい記録が取れているのは少年少女の方でした。しかし地形等の観察が不足していて、総じて歩くだけで精一杯という感じを受ける記録内容でした。計画書では係分担の明記がなく、従って責任の所在があいまいになり重大な忘れ物につながっていきます。打合せ等の準備会がもたれたのかとか、そこでのリーダーの指導性はどうかであったのかとか、登る以前の姿勢や意識が問われることにもなります。計画書の体裁も携行に便利で防湿の工夫がされているのは少なく、また複数で出場したパーティーは同じ内容の計画書を使って居り、工夫や個性を感じさせませんでした。読図と天気図では、地図の読み方が現地ですべて不足しているのは、準備段階での机上読図作業がされていないのが一因でしょう。天気図では、等圧線の書き方が誤っているという指摘がありました。

以上まとめてみました。基本的な事柄をきちんとおさえた登山が如何に難しいものかを痛感して居ります。やはりひとつひとつテーマをしぼりながら、こつこつと精進をつみ重ねていかなければと思います。

第21回全日本登山体育大会報告

○場所 九州 大分県 くじら山系

○活動目的 自然保護

○期日 昭和56年6月4日～7日

○参加者 笠原藤七・安藤誠 作・石坂一郎

○コース C班コース 別府駅前受付 4日午前11時～12時、それよりバスにて開会式場

○一日(4日)晴

長者原(チョウジャバル) ビジターセンターにて改めて受付(14時～15時)

(16時～17時)開会式、国旗、大会旗、県岳連旗(23府県)掲揚、聖杖受領、大会会長挨拶、名誉会長挨拶、祝辞、歓迎のことば、選手宣誓、C班は国民宿舎コス

モス荘割当、夜19時～21時 自然保護に就いて講話 (Aコース15県、Bコース10県、Cコース18県)

○二日(5日)晴

6時朝食 6.30長者原——8.00雨ヶ池——9.10坊がつる 9.30——13.00大船山(ダイセンザン) 1787m——15.00坊がつる 15.30 (講話) 17.00——17.40法華院 (温泉宿泊)

15時30分より自然保護について研修行事。夜坊がつるにてキャンプファイアー

○三日(6日)晴

6時朝食 7.10法華院(1300m)——8.00北千里浜——9.00久住別れ——10.00中岳(1791m)——

10.30 天狗ヶ城(1760m) —
 11.00 久住山(1787m) 20 —
 12. — 14.40

赤川国民宿舍久住高原荘
 夕食後アトラクション —
 神楽舞、約2時間

第四日(7日)晴

閉会式9時、謙田副会長挨拶の後、9時15分バスにて観光に出発、竹田市内の荒城の月で有名な岡城跡にて、滝簾太郎の銅像前にて記念撮影 — 稻積水中鐘乳洞 — 白杵石仏 — 大分市 — 別府、解散 — 笠原氏帰国の為別れ、安藤、石坂、別府市内宿泊

(8日)晴

朝7時45分発西鹿兒島行特急にて13時23分到着、同28分指宿枕崎線にて山川14時29分着、引き続きバスにて開聞、国民宿舍開聞山荘に

止宿、登山は9日早朝に決定、薩摩半島最南端の奇勝長崎鼻を観光

(9日)薄曇り

朝食を持参して7時9分のバスにて開聞岳登山口に向

う。登山開始7時15分、途中朝食をとり山頂へは10時10分、登山には2時間15分、924mは米山よりやや低い海岸にあるため乙甲と思う道は北側から登ってぐるぐる一廻りして頂上に達する。ガスにて視界悪く残念、10時45分下山、約1時間30分を要した

開聞山荘にて荷物をまとめバスにて山川駅、此処で西鹿兒島行快速で、安藤君とは西鹿兒島駅で別れ、もと来た日豊本線にて霧島神宮駅で下車、バスにて45分林田温泉へ、これよりえびの高原までタクシーで約35分、えびの高原荘(国民宿舍なれども建物は一級ホテル並)に止宿、温泉にて疲れをいやした

(10日)薄曇り

5時起床、8時お池巡りに出発、白紫池 — 六観音池 — 不動池 此等の池は噴火山の山頂に出来た池だ。後で韓国岳からの眺めで判った。不動池から10分いよ

いよ韓国岳(カラクニダケ)の登山口。辺りは噴煙がたちこめている。その硫黄山の廻りから登山は初まる。10時20分登り初め、頂上は11時50分、頂上には警察学校の生徒だけ。視界悪くこもガスの中だった。約1時間でもとの登山口に戻った。それより急ぎバスターミナルへ。13時の出発に間に合った。後で判ったが、このバスに乗れたので1日早く帰郷が出来た。霧島神宮駅に14時30分到着、15時7分発特急にて別府19時59分着、21時30分の乗船が出来、神戸に向った。

(11日)

朝11時30分神戸着、遊覧船にてポートピア81年で博覧会見物。夜22時10分のきたぐにて12日朝7時33分長岡に無事帰宅した。

評議員会報告

評議員会が5月10日新潟市駅前ステーションホテルにおいて、委任13団体、出席30団体50名を得て開催されました。

各団体送付済みの資料案件について、承認了解を得て閉会し、懇親会に移りました。役員改選、専門部会の廃合と2人副委員長長制、事業計画の年間日程挿入、行事担当の理事割り当てと、躍動する協会を目指し役員体制が計られました。

会員の皆様の事業参加と、協会役員への指導ご鞭撻宜しくお願い致します。

秀峰山岳会

創立40周年を祝う

7月5日、三条市ビック玉姫殿において、盛大に記念式典が催された。同会はこれを記念して、ユニークな内容を織り混ぜた会誌を刊行しました。

同会の歩みが記されていると共に、良き指導者の基に幅広い山行、各会との親睦、指導的役割を大きく果たしてきたことが読み取れる。

協会からは藤井常務理事が出席しました。

益々の同会の発展を祈念し、ましよう。

元日本山岳会会長 今西錦司氏来県

高齢の中、昨年より県内登山を希望され計画の打合せを進めてきました。7月17日來県、中越地区会員よりご協力を願ひ、平ヶ岳/燧ヶ岳/尾瀬と健脚を披露されました。20日会津の仲間に道案内の継続をお願いし、また山での再会を約してお別れしました。

あとがき

今年には寒波で大量遭難が発生、猛暑でも遭難が発生、どうなっているのでしょうか。人間は天候に勝てないのか。否、登山で絶対と言う言葉はないのだから、危険だから引返す等の、基本を忠実に守り登山をすれば、悲しい出来事は、少なくなるのではないのでしょうか。今基本を知らない人が多過ぎるのでは：